

各関係機関の長 殿

鹿児島県病虫害防除所長

令和3年度病虫害発生予察情報について

このことについて、発生予報第8号（11月）を発表したので送付します。

鹿児島県病虫害防除所

〒899-3401

南さつま市金峰町大野 2200

TEL 099-245-1081 (代表)

099-245-1157 (直通)

099-245-1149 (FAX)

テレホンサービス

鹿児島 099-296-6430

296-6431

ホームページアドレス：<http://www.jpnp.ne.jp/kagoshima>

メールアドレス：[nousou-boujo@pref.kagoshima.lg.jp](mailto:nousou-boujo@pref.kagoshima.lg.jp)



## 農薬の安全使用に努めましょう

### 農薬安全使用五つの柱

1. 使用する人の安全 使用者自身の健康管理, 安全使用
2. 作物に対する安全 適期, 適正防除で薬害防止
3. 農産物に対する安全 消費者へ安全な農産物を供給  
(農薬安全使用基準の遵守)
4. 環境に対する安全 周辺環境への影響防止  
(周辺住民等への危被害防止)  
(河川, 湖沼, 海などへの汚染防止)  
(養蚕, 養蜂などへの危被害防止)
5. 保管管理の安全 保管管理の徹底で事故防止

## 農薬ラベルを確認しましょう

## 農薬の飛散(ドリフト)にも注意しましょう

令和3年度 病虫害発生予報 第8号

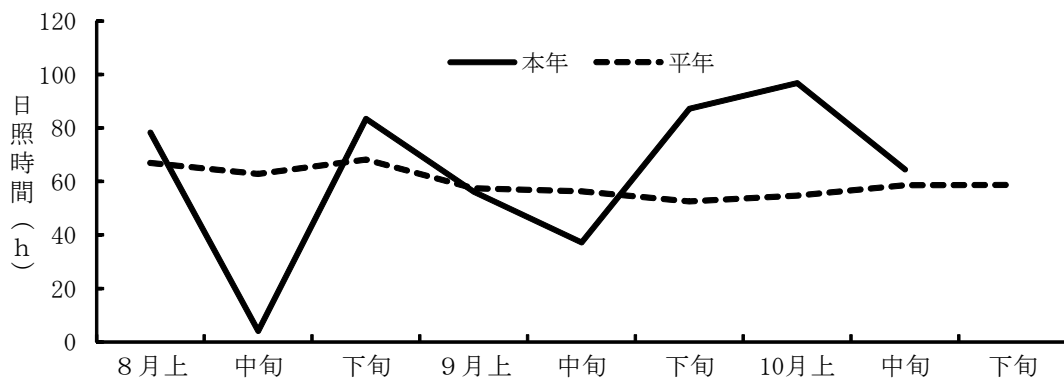
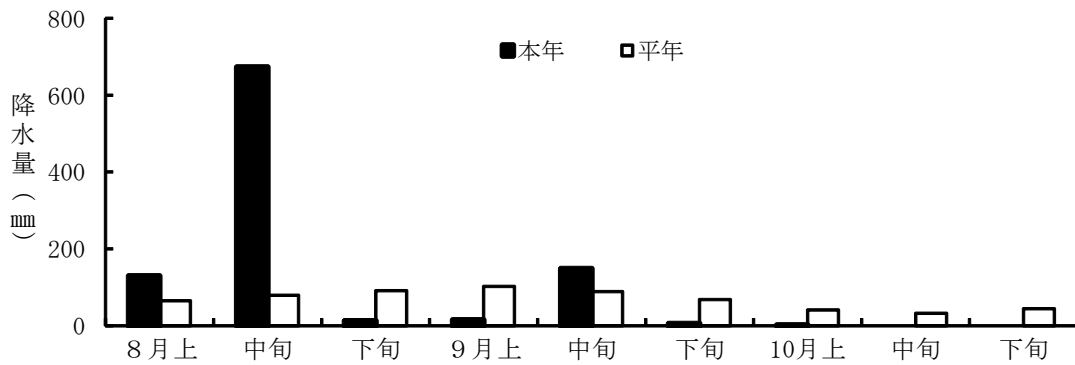
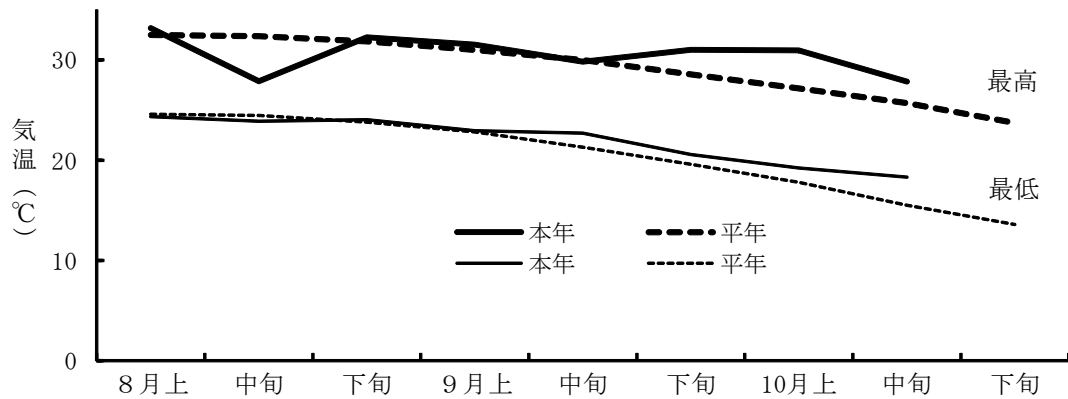
令和3年10月29日  
鹿児島県病虫害防除所

【気象概況】

I. 向こう1か月の予報（10月30日から11月29日） 令和3年10月28日 鹿児島地方气象台 発表

要素	地域	確率（％）			概要
		低い(少ない)	平年並	高い(多い)	
気温	九州南部	30	40	30	九州南部では、気温、降水量、日照時間ともに平年並みの見込み。奄美地方では、気温は平年並み、降水量は平年並みか少なく、日照時間は平年並みか多い見込み。
	奄美地方	30	40	30	
降水量	九州南部	30	40	30	
	奄美地方	40	40	20	
日照時間	九州南部	40	30	30	
	奄美地方	20	40	40	

II. 8～10月の気象情報（鹿児島地方气象台 観測点：加世田）



### 【病害虫発生予報の概要】

作物		病害虫名	発生量	
			現況	予報
野菜	キュウリ	うどんこ病	やや少	やや少
	イチゴ	うどんこ病	並	並
		炭疽病	やや多	やや多
		ハダニ類	多	多
	施設野菜共通	アザミウマ類	やや多	やや多
		コナジラミ類	やや多	やや多
	エンドウ類	シロイチモジヨトウ	やや少	やや少
		ハモグリバエ類	並	並
		アザミウマ類	並	並
	花き	キク	ハダニ類（県本土，施設）	並
アザミウマ類（県本土，施設）			並	並
〃（奄美地域，露地）			やや少	やや少
野菜・花き共通		ハスモンヨトウ	やや多	やや多
果樹	カンキツ	かいよう病（県本土・熊毛地域）	やや少	やや少
		〃（奄美地域）	やや少	やや少
		黒点病（県本土・熊毛地域）	多	多
		〃（奄美地域）	やや多	やや多
		ミカンハダニ（県本土・熊毛地域）	やや多	やや多
		〃（奄美地域）	並	並
茶樹	チャ	カンザワハダニ	多	多

【病害虫発生予報】

I. 野菜

1. キュウリ

(1) うどんこ病

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 対象作型 促成栽培
- (ウ) 発生量 やや少

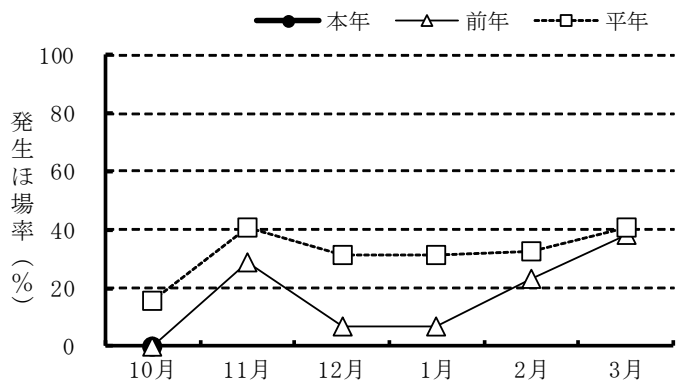
イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：やや少  
発生ほ場率0%（平年16%）

：やや低い（-）

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 発病葉は早めに除去し、ハウス外に持ち出して処分する。
- (イ) 多発すると防除が困難になるので、早めに防除する。
- (ウ) 薬剤は下位葉や葉裏に十分かかるよう散布する。
- (エ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。



うどんこ病の発生ほ場率 (キュウリ)

2. イチゴ

(1) うどんこ病

ア 予報内容

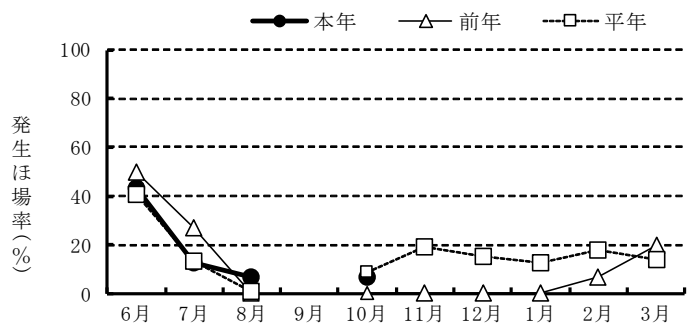
- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 発生量 並

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：並  
発生ほ場率7%（平年8%）：並

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 防除は予防に重点を置き、上位葉に発生しやすいので、葉裏をよく観察し、早期発見と初期防除に努める。
- (イ) 薬剤は、葉裏に十分かかるよう散布する。
- (ウ) 窒素肥料の過多や葉が混み合うと多発しやすくなるので、適切な栽培管理を行う。
- (エ) 発病葉などは早めに除去し、施設から持ち出して処分する。
- (オ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。



うどんこ病の発生ほ場率 (イチゴ)

(2) 炭疽病

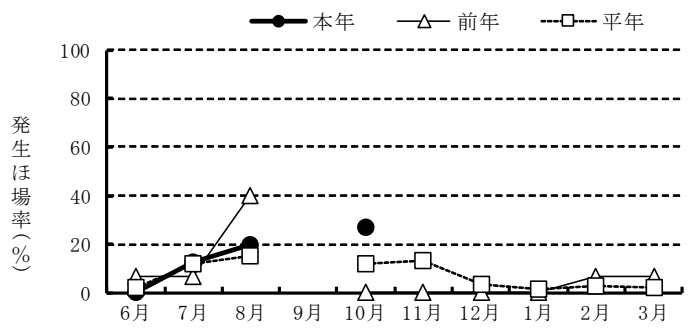
ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

- (ア) 調査結果 発生量：やや多  
発生ほ場率27%（平年12%）

：やや高い（+）



炭疽病の発生ほ場率 (イチゴ)

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 防除は予防に重点を置き、新葉の展開タイミングに合わせ10～14日間隔で行い、株全体にかかるよう十分量を散布する。発病が認められた場合は散布間隔を短縮する。
- (イ) 萎凋した株や発病葉は早急に除去し、ほ場外で適切に処分する。
- (ウ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。

(3) ハダニ類

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 多

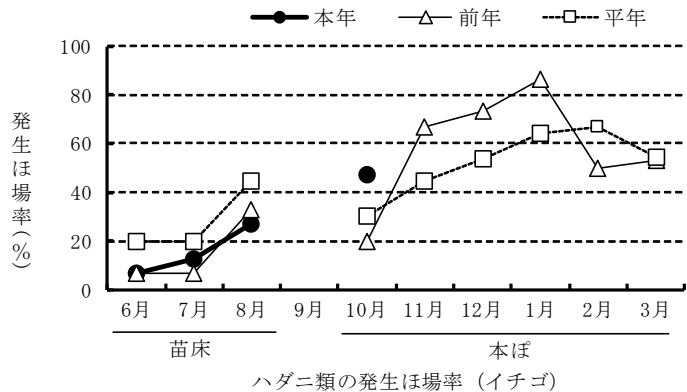
イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：多

発生ほ場率47% (平年30%)

：やや高い (+)

発生程度の高いほ場を認めた (+)



ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 天敵を放飼するほ場では、放飼前の密度がその後の防除効果に影響するため、防除を徹底する。導入後は天敵への影響を考慮した体系防除を行う。
- (イ) 薬剤の防除効果を高めるため、下葉かきを行ってから葉裏にかかるよう散布する。
- (ウ) 薬剤によっては感受性が低下しているため、散布後は防除効果を確認する。
- (エ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布に努める。
- (オ) 薬剤によっては、ミツバチに影響があるので薬剤選定に注意する。

3. 施設野菜共通

(1) アザミウマ類

ア 予報内容

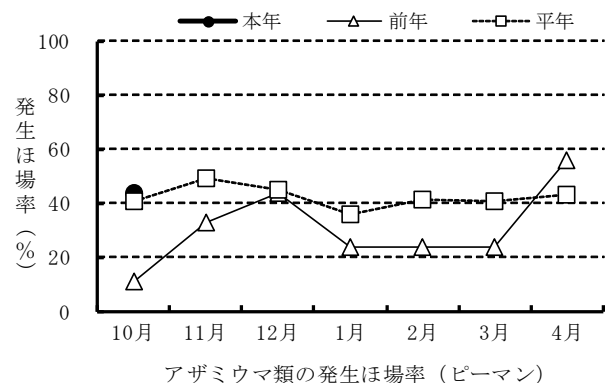
(ア) 発生地域 県本土

(イ) 対象作物 キュウリ, ピーマン  
イチゴ

(ウ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

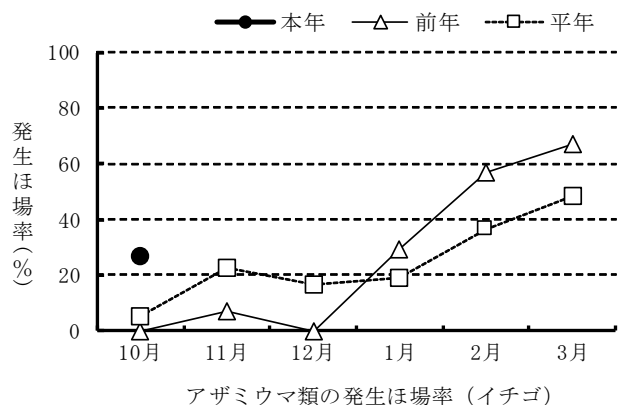
(ア) 調査結果 発生量：やや多



作物名	発生ほ場率 (%)		概 評
	本年	平年	
キュウリ	0	0	並
ピーマン	44	41	並
イチゴ	27	5	多

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) キュウリ黄化えそ病の病原ウイルスを媒介する。ハウス開口部 (サイド等) 等に粘着トラップを設置し、早期発見と早期防除に努める。
- (イ) ピーマン, イチゴでは花や新芽の中など薬剤のかかりにくい場所に生息するので、薬剤散布は丁寧に行う。



(ウ) 天敵を放飼するほ場では、放飼前の密度がその後の防除効果に影響するため、防除を徹底する。導入後は天敵への影響を考慮した体系防除を行う。

(エ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布に努める。

(2) コナジラミ類

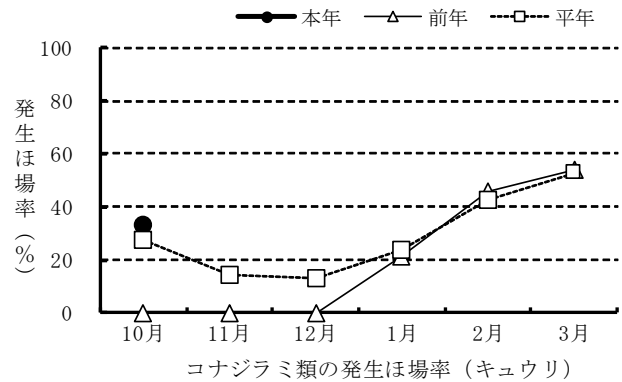
ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県本土
- (イ) 対象作物 キュウリ，メロン，トマト  
ミニトマト，ピーマン  
イチゴ，サヤインゲン

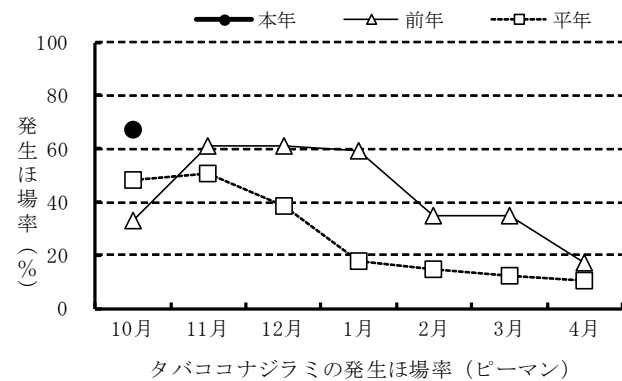
(ウ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：やや多



作物名	発生ほ場率 (%)		概 評
	本年	平年	
キュウリ	33	27	並
ト マ ト	0	0	やや少
ピーマン	67	48	やや多
イ チ ゴ	27	13	やや多



ウ 防除上注意すべき事項

(ア) キュウリやメロンにウリ類退緑黄化病，  
トマトやミニトマトにトマト黄化葉巻病

等の病原ウイルスを媒介する。生育初期にこれらのウイルス病が発生すると被害が大きくなるので、以下の点に注意して総合的な防除対策に努める。

- ・黄色粘着トラップを設置して早期発見・早期防除に努める。
- ・発病株は伝染源になるので、疑わしい株も含め、見つけしだい除去し、ハウス外に持ち出して埋没処分するか、ビニール袋等に入れて処分する。

(イ) サヤインゲンでは莢に白化症を，トマト，ミニトマトでは着色異常果を生じる恐れがあるので、早めに防除する。

(ウ) 天敵を放飼するほ場では、放飼前の密度がその後の防除効果に影響するため、防除を徹底する。導入後は天敵への影響を考慮した体系防除を行う。

(エ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布に努める。

#### 4. エンドウ類

##### (1) シロイチモジヨトウ

###### ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 やや少

###### イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：やや少

発生ほ場率0% (平年27%)

：やや低い (-)

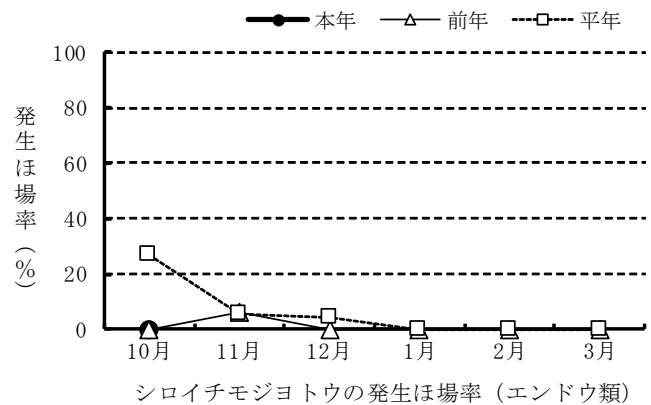
###### ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 卵塊や分散前の若齢幼虫が寄生した葉はその都度摘み取り処分する。幼虫は葉をつづり合わせたり葉の内部に食入し、食害葉は網目状に白く変色するので、これを目安にする。

(イ) 特に生育初期の被害が大きいのでほ場を見回り、寄生葉は見つけ次第摘み取り処分する。

(ウ) 薬剤防除は効果の高い若齢幼虫期に行う。

(エ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤とのローテーション散布に努める。



##### (2) ハモグリバエ類

###### ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 並

###### イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：並

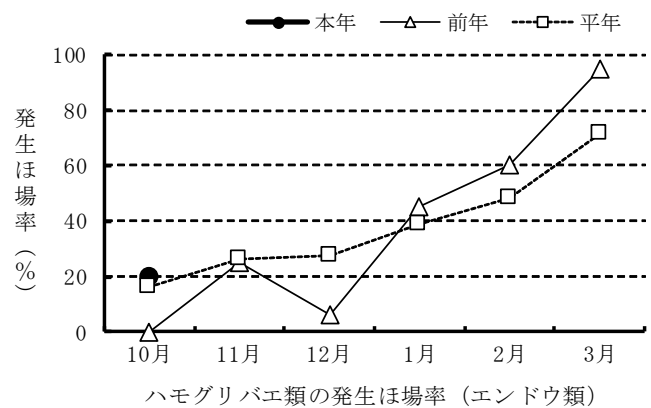
発生ほ場率20% (平年16%)：並

###### ウ 防除上注意すべき事項

(ア) この時期の主な発生種はマメハモグリバエである。

(イ) 多発してからの防除は困難なので、初期防除に努める。

(ウ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。



##### (3) アザミウマ類

###### ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 並

###### イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：並

発生ほ場率0% (平年1%)：並

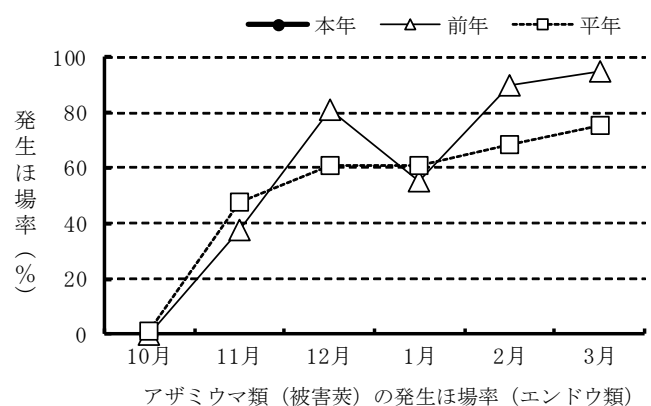
###### ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 主な発生種はハナアザミウマである。

本虫は幼莢への産卵により白ぶくれ莢

を発生させ、商品性を落とすので、青色粘着トラップ等を活用して発生状況を把握し、初期防除に努める。

(イ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。



5. 野菜・花き共通

(1) ハスモンヨトウ

ア 予報内容

- (ア) 発生地域 県内全域
- (イ) 対象作物 キャベツ等アブラナ科野菜、イチゴ、トマト、根深ネギ、豆類(エンドウ類、ソラマメ、サヤインゲン)、キク等

(ウ) 発生量 やや多

イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：やや多

作物名	発生ほ場率(%)		概評
	本年	平年	
トマト	0	10	やや少
ピーマン	22	3	やや多
イチゴ	33	25	並
キャベツ	42	17	多
エンドウ類	10	21	並
キク	0	4	並

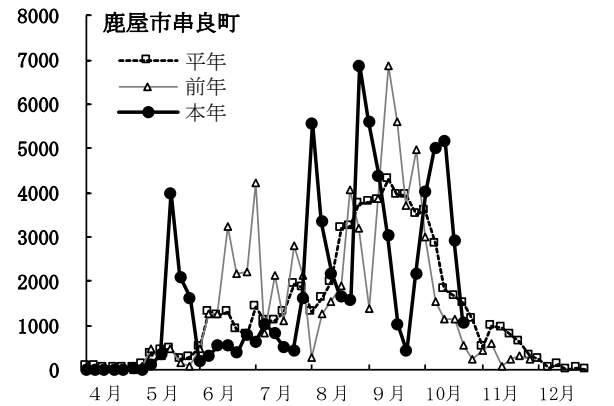
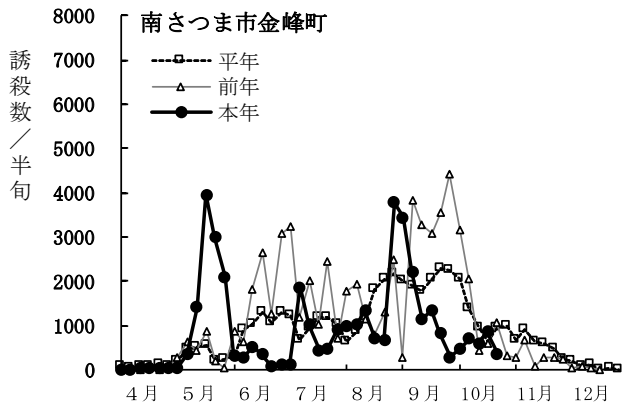
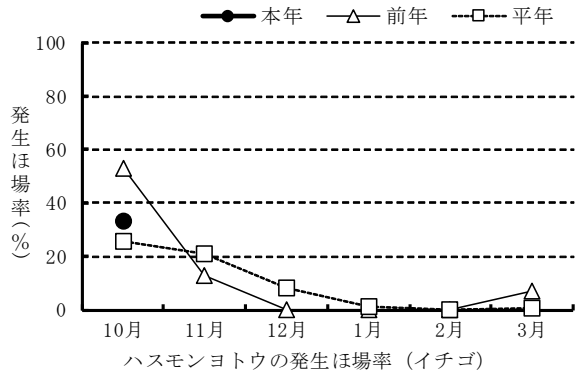
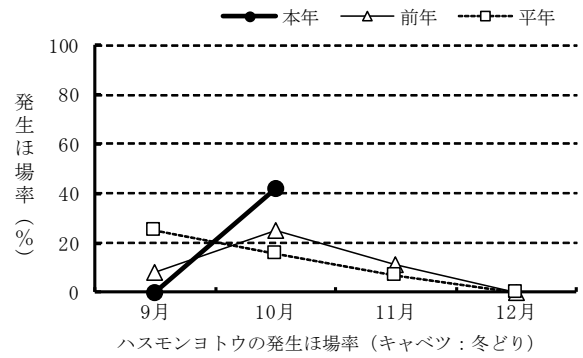
注) キクは被害発生ほ場率

フェロモントラップ誘殺数

南さつま市金峰町：並，鹿屋市串良町：多い(+)

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 発生状況は、作物や各地域で異なるため、ほ場を見回り、幼虫の発生状況を確認する。
- (イ) 若齢幼虫は集団で表皮だけを残して食害する(白変葉)ので、発生を目安にする。
- (ウ) 卵塊や若齢幼虫が寄生している葉は、見つけ次第摘み取り処分する。
- (エ) 中・老齢幼虫になると薬剤が効きにくいので、防除は若齢幼虫期に行う。
- (オ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤とのローテーション散布に努める。





防除に関する今月の留意事項

1. エンドウ類のごま症対策

スナップエンドウの「ごま症」を引き起こす病害として、うどんこ病菌及び褐紋病菌が影響していることが明らかとなった。うどんこ病、褐紋病は例年11月末から12月にかけて初発が認められる。うどんこ病は1段目の収穫時期から、褐紋病は下葉付近から発生し、生育とともに収穫位置付近まで上位進展するので、防除の遅れ・被害拡大とならないように、以下の点を考慮して防除対策に努める。

- (1) 未発生ほ場では早期発見に努め、既に発生しているほ場では早めに防除を行う。
- (2) 年内から定期的に体系防除を行うと防除効果が高い。
- (3) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。

II. 花き（キク）

(1) ハダニ類

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土（施設）

(イ) 発生量 並

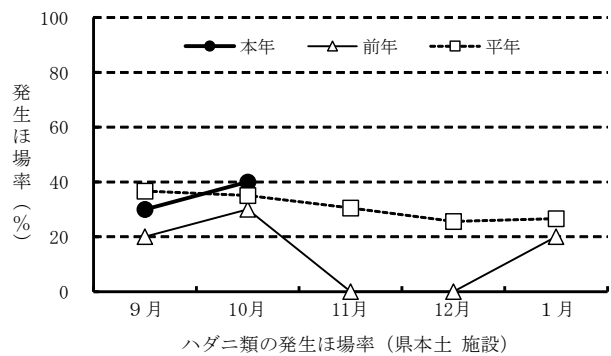
イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：並

発生ほ場率40%（平年35%）：並

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 出入口や前作での発生場所近く等でスポット状に発生するケースが多いので、ほ場全体をよく見回り、早期発見と早期防除に努める。
- (イ) ほ場内と周辺の雑草や収穫後の残さ等は早めに除去し、適正に処分する。
- (ウ) 薬剤は葉裏までよくかかるように散布する。
- (エ) 同一系統薬剤の連用を避け、作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。



(2) アザミウマ類

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量

県本土（施設） 並

奄美地域（露地） やや少

イ 予報の根拠

< 県本土（施設） >

(ア) 調査結果 発生量：並

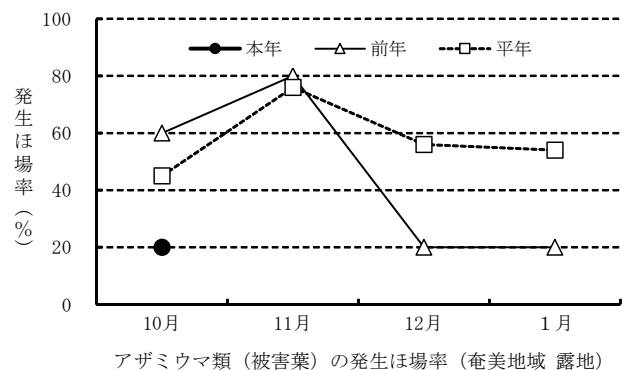
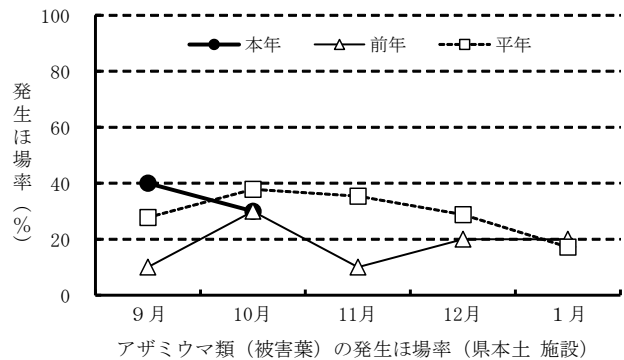
発生ほ場率30%（平年38%）：並

< 奄美地域（露地） >

(ア) 調査結果 発生量：やや少

発生ほ場率20%（平年45%）

：やや低い（-）



ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) キクエそ病(TSWV), キク茎えそ病(CSNV)を媒介するので, 母株や苗の導入に際しては, 本虫の寄生やウィルス感染に細心の注意を払う。
- (イ) ハウスの開口部には目合い0.6mm以下の防虫ネットを張る。
- (ウ) ハウスの開口部等に青色粘着トラップを設置し, 早期発見と早期防除に努める。
- (エ) 除草等の環境整備を行うとともに, 母株の防除を徹底する。
- (オ) 同一系統薬剤の連用を避け, 作用性の異なる薬剤のローテーション散布を行う。
- (カ) 栽培終了後は, 速やかに残渣を処分する。

Ⅲ. 果 樹

1. カンキツ

(1) かいよう病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量

県本土・熊毛地域(果実) やや少

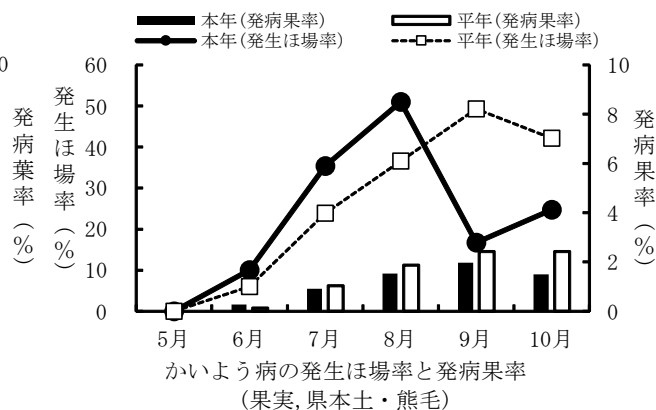
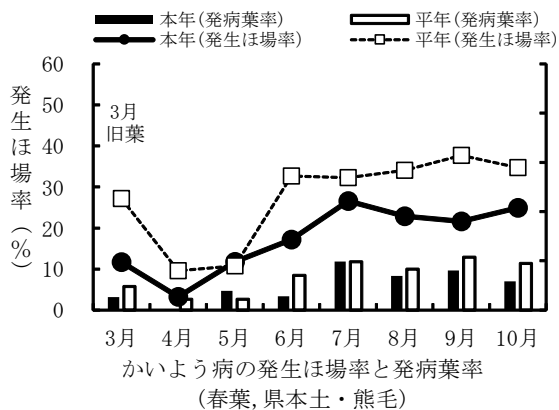
奄美地域(果実) やや少

イ 予報の根拠

<県本土・熊毛地域>

(ア) 調査結果

	春葉	果実
発生量	やや少	やや少
発生ほ場率	24.9% (平年34.7%) : やや低い (-)	24.7% (平年42.1%) : やや低い (-)
発病率	1.2% (平年 1.9%) : やや低い (-)	1.5% (平年 2.4%) : やや低い (-)



<奄美地域>

(ア) 調査結果

	春葉	果実
発生量	少	やや少
発生ほ場率	29.0% (平年23.0%) : 並	0% (平年17.0%) : やや低い (-)
発病率	0.3% (平年 0.4%) : 並	0% (平年 0.3%) : やや低い (-)

ウ 防除上注意すべき事項

- (ア) 罹病病した夏秋梢やミカンハモグリガの食害を受けた夏秋梢はせん除し, 伝染力の強い越冬病斑を少なくする。

(2) 黒点病

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量

県本土・熊毛地域 多

奄美地域 やや多

イ 予報の根拠

<県本土・熊毛地域>

(ア) 調査結果 発生量：多

発生ほ場率88% (平年55%)

: 高い (+)

発病果率6% (平年15%)

: やや少 (-)

<奄美地域>

(ア) 調査結果 発生量：やや多

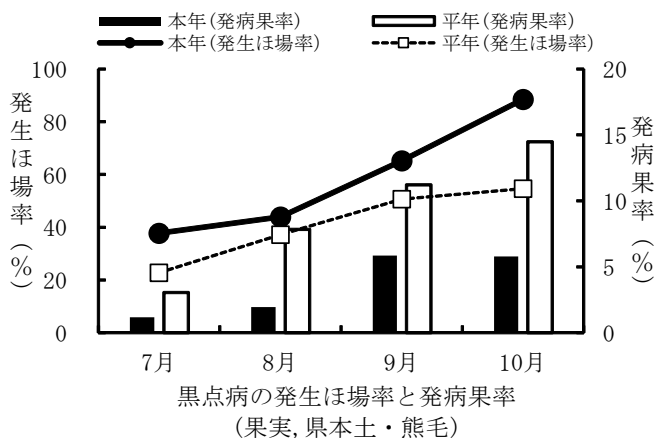
発生ほ場率43% (平年9%) : やや高い (+)

発病果率4% (平年1%) : 高い (+)

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 多雨が予想される場合には予防散布を行う。

(イ) 伝染源となる枯れ枝はこまめにせん除し、せん定くずは園外に持ち出して処分する。



(3) ミカンハダニ

ア 予報内容

(ア) 発生地域 県内全域

(イ) 発生量

県本土・熊毛地域 やや多

奄美地域 並

イ 予報の根拠

<県本土・熊毛地域>

(ア) 調査結果 発生量：やや多

発生ほ場率31% (平年28%) : 並

寄生葉率7% (平年3%) : 高い (+)

発生程度の高いほ場を認めた (+)

<奄美地域>

(ア) 調査結果 発生量：並

発生ほ場率0% (平年1.4%) : 並

寄生葉率0% (平年0.1%) : 並

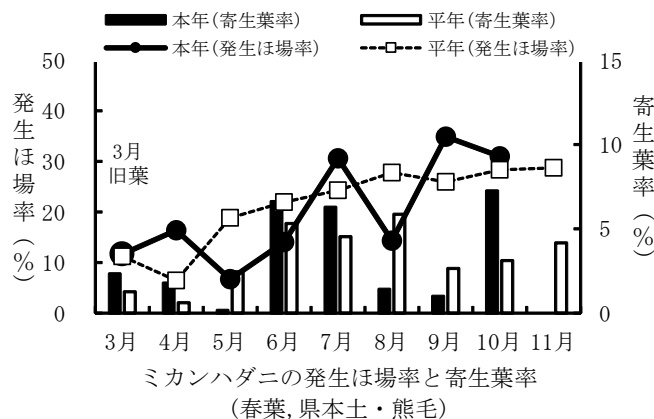
(イ) 気象予報

降水量：平年並みか少ない (+)

ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 1葉当たり雌成虫数0.5~1.0頭 (寄生葉率で30~40%) を目安に防除する。

(イ) 同一系統薬剤の使用は年1回とし、葉裏までかかるように丁寧に散布する。



#### (4) 果実吸蛾類

##### ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土・熊毛地域

(イ) 発生量 並

##### イ 予報の根拠

(ア) 調査結果 発生量：並

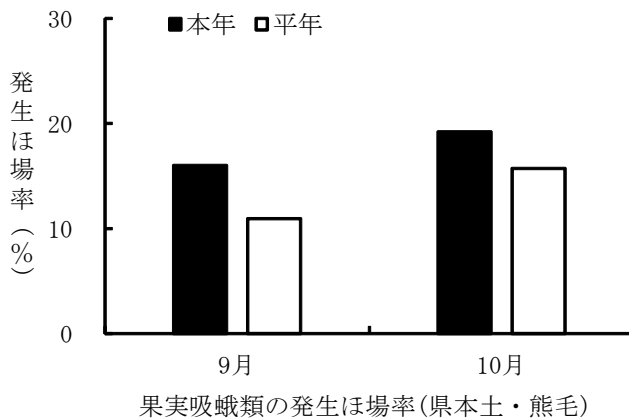
発生ほ場率 19% (平年16%)

：並

##### ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 果実吸蛾類は果実を吸汁・加害し腐敗落果させる。夜間に活動し果皮の薄い早生温州等に集まりやすい。

(イ) 網目5～10mmの防蛾網で被覆するほか、幼虫の食草となるアケビ、ムベ、アオツヅラフジ等を極力除去する。黄色忌避灯を用いる場合は、ほ場全体が2Lux以上の明るさになるように設置する。



#### 防除に関する今月の留意事項

##### 【カンキツ】

##### 1. サビダニ類

- (1) 県内のほぼ全域に生息するリュウキュウミカンサビダニは、秋季以降も果実上で加害し続けるので、被害果を認めたら直ちに防除する。
- (2) 秋季に多発した樹では、翌年も同じ樹で発生する機会が多いので、防除に努める。

##### 2. 貯蔵病害（青かび病、緑かび病、軸腐病）

収穫時の気温が高く降雨が多いと腐敗果が発生しやすい。なお、軸腐病の病原菌は黒点病と同じ菌であるため、黒点病の発生が多いほ場では注意する。

- (1) 貯蔵を要する普通温州や中晩柑類は収穫前に必ず防除する。
- (2) 防除薬剤は使用基準を厳守し、収穫予定日を想定し、収穫前日数に注意して選定する。
- (3) 収穫時には果実に傷をつけないように手袋を使用し、果梗部の二度切りは丁寧に行う。

##### 【ナシ】

##### 1. 黒星病

黒星病の病原菌は、11月に雨が多いと罹病葉から飛散する。花芽りん片に感染すると主に翌春の伝染源となるので、以下の点に注意して防除に努める。

- (1) 花芽りん片への感染を防止するため、10～11月に必ず2～3回防除する。
- (2) 落葉した罹病葉も伝染源となるので適正に処分する。

#### IV. 茶 樹

##### (1) カンザワハダニ

###### ア 予報内容

(ア) 発生地域 県本土

(イ) 発生量 多

###### イ 予報の根拠

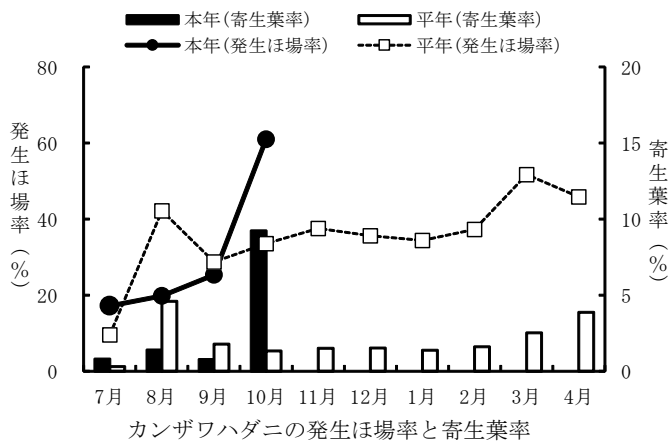
(ア) 調査結果 発生量：多

発生ほ場率 61% (平年 34%)

：多

寄生葉率 9.2% (平年 1.3%)

：高い (+)



###### ウ 防除上注意すべき事項

(ア) 越冬前のカンザワハダニの密度は翌春の発生量に大きく影響するので、秋整枝後に防除を行う。発生が多い園では秋整枝直後と11月中旬～下旬に防除を行う。

(イ) 天敵の活動が活発な時期なので、天敵に影響の少ない薬剤を使用する。

(ウ) 薬剤は、葉裏や裾部に薬液が十分にかかるように散布する。

#### 防除に関する今月の留意事項

##### 1. チャトゲコナジラミ

多発するとは場一面に成虫が乱舞し、作業性を低下させるほか、幼虫が寄生した枝ではすす病が発生し光合成能力を低下させる。

(1) 秋整枝は、寄生葉が除去され密度低下が期待される。

(2) 発生が多い園では秋整枝後に薬剤を葉裏まで十分にかかるように散布する。

(3) 本虫には天敵シルベストリコバチが有効なため、本天敵に影響の少ない薬剤を使用するように努める。

## 農薬の適正使用について

農薬は以下の点に注意して適正に使用しましょう。

1. 使用前にラベルや説明書をよく読む。  
決められた対象作物・使用時期・回数・使用濃度等を守り，記載された用途，方法以外では使用しない。
2. 使用する農薬にあわせて，適切な防除衣，保護具（マスク・手袋など）を着用する。
3. 散布前には防除器具の整備・点検をする。
4. 体調がすぐれないときは散布作業を避ける。
5. **散布時には薬剤がほ場の外に飛散したり，流出したりしないよう十分注意する。**
6. **クロルピクリン剤は，住宅地および畜舎に隣接するほ場や，無風の時，土壌が乾燥しているときは使用しない。注入後は直ちに穴をふさぎポリエチレンフィルム等で10日以上被覆する。**
7. ランネート剤は毒性が強いので，施設内や噴霧のこもりやすい場所では使用しない。
8. 使用期限の切れた農薬，不要になった農薬および使用済みの空容器は適正に処分する。
9. 農薬は食品と区別し，鍵をかけて保管する。
10. 農薬の散布記録をつけておく。

### 「予報の根拠」の記載方法

- 調査結果の発生量は，前月の巡回及び定点調査による。
- 野菜類共通病害虫の発生量は，各作物での発生量やトラップ調査結果等を総合的に基づいた総合評価。
- 発生ほ場率と調査場所を記載しない発生数・発生率は，巡回調査の結果。
- 果樹と茶樹の定点防除園又は無防除園は，果樹部と茶業部での調査結果。
- 調査結果や気象予報等の末尾の（+），（-）は，発生量の増加，減少要因を示す。
- 気象予報は，向こう1か月の長期予報。
- 平年値は原則として過去10年間の平年を用い，本年調査値の後に（平年〇〇）で表記する。ただし，過去3年間の平均値を用いた場合は（過去3年〇〇）と表記する。